

「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代」

大阪大学総合学術博物館

肥塚 隆

畑田家住宅活用保存会

「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代」

大阪大学総合学術博物館

肥塚 隆

現在のアフガニスタンの地は、中央アジア、西アジア、南アジアが接する文明の十字路です。まず前4世紀末のアレクサンドロス大王の東征がきっかけとなってギリシア・ヘレニズム文化が移植され、その後相次いで異民族が侵入し、紀元後の早い時期にはクシャーン朝の支配するところとなり、仏教美術が開花しました。このことからわかる通り、その地理的重要性のゆえにつねに列強の注目する地域でしたし、現在の困難な状況もそのことに起因しています。本講ではソ連の侵攻以前の1970年代に撮影したスライドによって、近年破壊されたバーミヤーンの大仏を含むこの国の古代美術を紹介して、異文化交流について考えてみたいと思います。

マスコミがほとんど取り上げないこともあって、アフガニスタンは日本人にはなじみの少ない国でした。ところが昨年(2001年)9月の同時多発テロの報復として翌月にアメリカが空爆を開始したために、連日アフガニスタンのことが報道され、にわかには人々の注目を集めることになりました。この国がしばしば「文明の十字路」と呼ばれるのは、その位置ゆえに東西の文明が伝えられたからですが、古来さまざまな民族が侵入して覇権を争った土地でもありました。1979年の末に旧ソ連軍がこの国に侵入したことがきっかけとなって、内戦が激化し、30年近くも一般人の旅行は不可能となりました。その間に多くの文化遺産が傷つけられ、略奪され、昨年3月にバーミヤーンの大仏がタリバーンによって破壊されたことは日本でも大きく報道されたので、ご存知の方も多いでしょう。

たまたま私は1975年と77年の2度、成城大学の高田修教授(当時)を隊長とする美術調査隊の一員としてアフガニスタンを訪れ、遺跡や美術品の写真をかなり撮影しました。その後私は1度もこの国を訪ねていませんが、本年6月カルザイ氏が大統領に就任して暫定政権のもとで徐々に平和が回復されつつあるようです。しかし貴重な文化遺産の多くは失われるか、海外に流出したと思われます。この地域に各地の文化が開花したことも、またそれらが破壊されたことも、異文化交流の結果であります。

それでは前3世紀ごろから8世紀ごろまでの美術遺品を写真で見てください。

アフガニスタンの中部をヒンドークシュ山脈が走り、その南北で気候条件も大きく異なります。6世紀中ごろまでは、インドと中央アジアを結ぶルートは、現在のパキスタン北部のカラコルム山脈経由でしたが、それ以後はヒンドークシュ越えに変わりました。ヒンドークシュ山脈から北が中央アジアで、冬の積雪期にヒンドークシュ山脈を越えるのは困難をきわめましたが、1970年代前半に旧ソ連がサラング峠にトンネルを掘り、道路を建設したので、首都のカーブルから陸路で旧ソ連との国境のアム・ダリヤ(オク

サス川) まで容易に達することができるようになりました。一方アメリカはパキスタンのペシャーワルとカブルを結ぶ道路を整備しましたが、これらはいずれも軍事行動の布石でした。



写真1 サラング峠

クンドゥズは旧ソ連(現在のタジキスタン)との国境に近い都市で、華やかに飾られた馬車が走っていました。この立派な馬は、名馬のほまれ高い中央アジアの汗血馬の子孫でしょうか(写真2)。



写真2 クンドゥズの馬車

クンドゥズの町をはずれると砂漠地帯となり、羊の群れを追う遊牧民やラクダの行列に出会うようになります。この砂漠が中国の敦煌あたりまで続いているのです(写真3)。

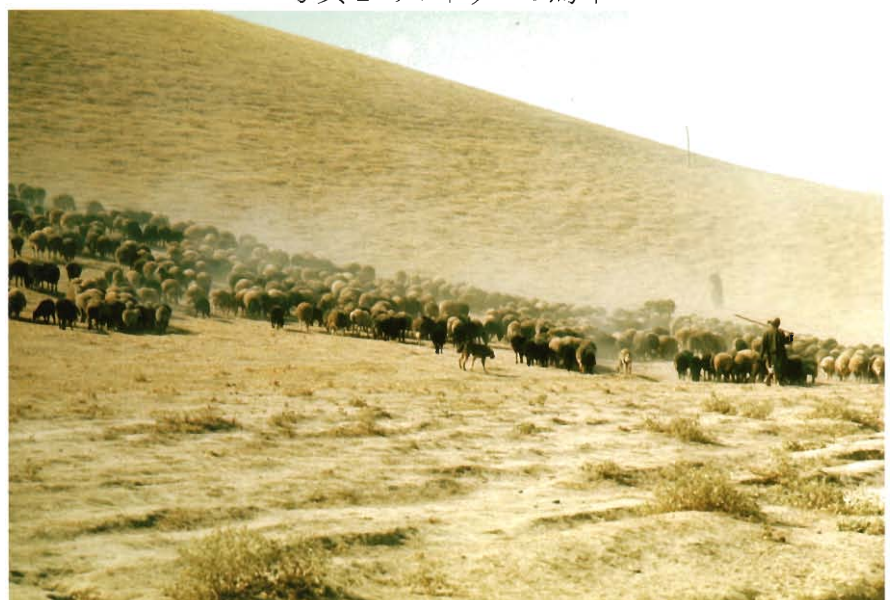


写真3 クンドゥズからアイハヌムへ 羊の群れ

[アイ・ハヌム] グレコ・バクトリア文化

前4世紀後半にアレクサンドロス大王がインダス河流域まで軍隊を進め、それがきっかけとなってギリシア人が移住し、前3世紀中葉にアム・ダリヤ流域にバクトリア王国を建国しました。このバクトリア王国の遺跡は永らく不明でしたが、アム・ダリヤの南岸のアイ・ハヌムでフランスの調査隊が1964年から王宮、神殿、墓廟、ギムナジウム(体育場)、円形劇場などからなる純然たるギリシア式遺構を発掘しました。これがバクトリア王国の主要な都市であったことが判明し、ヘレニズム文化の伝来が跡づけられました(写真4)。



写真4 アイ・ハヌムの遺跡 前3-前2世紀



写真5は石灰岩製の柱の上端の部材です。アイ・ハヌムからの出土品にはイラン文化の影響も認められるものの、この柱頭に見るように全般的にはギリシアの要素が濃厚です。

写真5 擬コリント式柱頭 前3-前2世紀 アイ・ハヌム出土 石灰岩
現地発掘事務所

キュベレ女神が、有翼の女神ニケとともにライオンの引く戦車に乗って祭壇に向かい、上方には太陽神ヘリオス、三日月、星が刻まれています。キュベレは、オリエントで古くから信仰されていた豊穡の女神です。カーブル博物館の2階に展示されていましたが、旧ソ連軍の爆撃で2階は壊滅状態になったという事なので、その存在が危ぶまれます(写真6)。



写真6 キュベレ女神の円板 アイ・ハヌム出土 前3-前2世紀 銀に鍍金 直径 25cm カーブル博物館

[ベグラーム] クシャーン文化

ギリシア人はやがて土地の人々と同化し、前1世紀には中央アジアからサカ族（ギリシア語でスキタイ）やパルティア族が移住し、1世紀中葉にはイラン系のクシャーン族が侵入して、現在のアフガニスタンからパキスタンにかけての地域は異民族による支配が相次ぎました。なかでもクシャーン族は、都を現在のペシャーワルに置き、中央アジアからインドの北半分にあつた大帝国を築き、中国、インド、イラン、ローマを結ぶ通商路を支配して経済的にも大いに繁栄しました。カーブルの北約70キロのベグラームはクシャーン朝の夏の都であつたと考えられ、その住居址から地中海沿岸の工芸品、インドの象牙細工、中国の漆器などが出土しました。指を口にあてたあどけないポーズのこの彫像は、エジプト起源のホルロスという小児神であり、ギリシアではハルポクラテースと呼ばれました。地中海沿岸からの輸入品と思われます(写真7)。

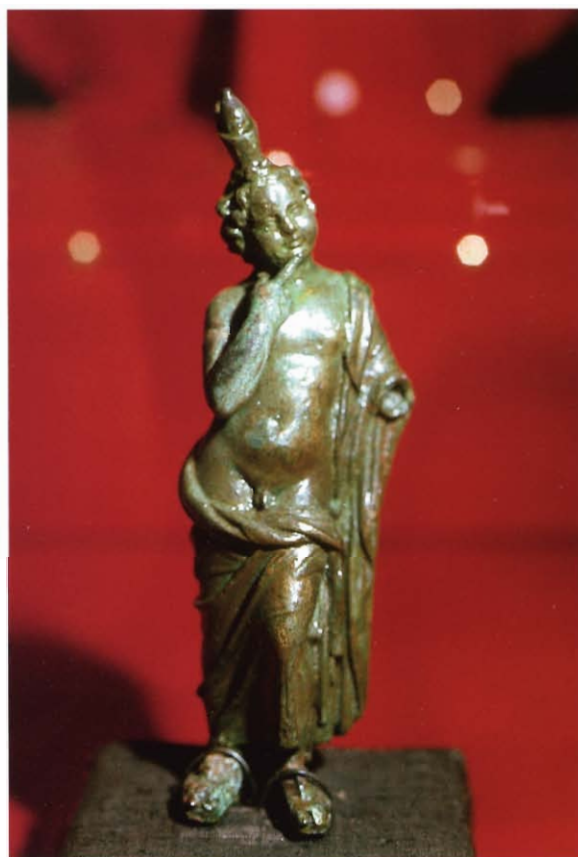


写真7 小児神ハルポクラテース立像 ベグラーム出土 1世紀頃 青銅 高 13.3cm カーブル博物館

ガラス製のゴブレットに4人の男女をエナメルで描いていて、そのうち1人の女性は腰掛けて花輪を編み、1人の男性は花輪をかごに入れて運んでいます。エジプトのアレクサンドリアあたりで制作されたと推定されています。クシャーン朝の貴族は、このようなゴブレットでワインを楽しんでいたのでしょうか。当時の世界最先端の美術工芸の粋に囲まれた、豪華な生活をうかがうことができます(写真8)。



写真8 彩絵ゴブレット ベグラーム出土 2世紀頃 ガラス 高13.5cm カーブル博物館

ベグラームからは象牙作品も多数出土し、それらは木製の家具に貼りつけてあったと思われる。豊満な女性の表現から考えて、インドからの輸入品とされています。ベグラームの住居址の発掘品は非宗教的な工芸品でしたが、周辺の寺院址からは仏像などの仏教彫刻が出土しました(写真9)。



写真9 箱蓋の人物像 ベグラーム出土 2世紀頃 象牙 29x46.5cm(上の板) カーブル博物館

〔ハッダとショトラク〕 キダーラ・クシャーン文化

クシャーン朝は3世紀中ごろにササン朝ペルシアの侵入をうけて衰退し、その後キダーラ・クシャーン朝として復興しました。この時代に新しく西方の文化が流入したらしく、東部のジャラーラーバード近郊のハッダを中心に塑造彫刻が栄えました。一方カーピシー地方の片岩を主体とする石彫は、正面性が強くイラン的な要素が認められます。 タパ・ショトールの仏教寺院址は1965年以来アフガニスタン考古学研究所が発掘し、粘土彫刻を安置した多数の仏龕が明らかにされました。中でももっとも注目されるのがこの仏龕で、中央の仏陀坐像の左右の壁を背にして向き合う菩薩と供養者のそれぞれ2体は大破していましたが、仏陀の左右奥に位置する男女は比較的保存がよく、その図像はきわめて

興味深いものです。向かって左の男性は豊かな鬚をたくわえ、肩にライオンの皮をかけていて、ギリシア神話最大の英雄ヘラクレスの図像を継承していることは明らかです。その反対側に位置する女性は、あふれんばかりの果物を盛った豊穡の角を手にしていて、運命の女神テュケーと思われまます。それらはそれぞれ



写真10 仏陀坐像と守護神 4世紀頃 ストゥッコ (塑造) ジャラーラーバード、タパ・シヨトル

ヘラクレスとテュケーの姿をとった金剛力士と鬼子母神と考えられ、仏教とヘレニズムとの融合の典型例です。これらは残念ながら1979年に破壊されたそうです(写真10)。

襟元から右手を出したポーズは、ギリシアの三大悲劇詩人の1人ソフォクレスのそれと共通します。粘土で成型し石膏で仕上げたストゥッコ彫刻で、柔らかな素材を生かした優美な作品です(写真11)。

写真11 仏陀立像 ハッダ出土 4世紀頃 ストゥッコ カーブル博物館



写真12 燃燈仏立像 ショトラク出土4-5世紀 片岩 高83cm カーブル博物館

写真12はカーピシー地方のショトラクから出土した作品で、中央の燃燈仏が釈迦の前生の青年メーガに対し来世において仏陀となると予言した場面を表現しています。その図像はガンダーラのそれを継承していますが、左右相称の構図、正面向きの動きの少ない姿勢、顔や手足が大きく均整を欠く体軀、紐を貼りつけたような襷などは、カーピシー地方独特の表現です。また両肩の火炎も、仏陀の威光を象徴するためにこの地方で好まれました。

[バーミヤーン石窟]

バーミヤーンは、アフガニスタン中部のヒンドゥークシュ山中の海拔2500メートルの高地にあるオアシスの町です。町の北にある断崖に東西1.3キロにわたって仏教石窟が掘られていて、その総数は750窟ほどもあります。写真13は町の南の丘から石窟を遠望したもので、手前すなわち断崖の南側に西から東へバーミ



写真13 バーミヤーン石窟遠望

ヤーン川が流れ、その両側が緑の多いオアシスとなっていて、バザールが並んでいます。スライドの左右の端に大仏が見え、西の大仏は石窟群の西端に位置しますが、東の大仏の東にはさらに少し石窟が続いています。

中国の僧玄奘は、インドへの旅の途中に中央アジアからヒンドゥークシュ山脈を越え、このバーミヤーンに629年に立ち寄っています。彼の旅行記『大唐西域記』巻1の記述を要約して現代語訳すると次のようになります。

「梵衍那(バーミヤーン)国は東西2000里余り、南北300里余りで、雪山の中にある。都の市街は崖に沿って長さ6、7里あり、北は高い岩山を背にしている。麦はあるが、花や果物は少なく、牧畜に適していて、羊や馬が多い。気候は寒くて厳しく、毛皮や毛織物を着ることが多い。信仰心が特にあつく、三宝(仏法僧)から神々に至るまで真心をつくし、心のかぎり^{とうせき}に敬っている。仏教の伽藍は数十か所あり、僧侶は数千人いて、小乗(上座部仏教)を学んでいる。王宮の東北の山に高さ140～150尺の仏立像があり、金色に輝き、宝飾がまばゆい。東にこの国の先代の王が建てた伽藍がある。その東に^{とうせき}鍮石製の高さ100尺余りの釈迦仏の立像があり、体をいくつかの部分に分けて別々に鑄造している。王宮の東2、3里の伽藍の中に長さ1000尺余りの涅槃像がある。」

玄奘の記述は簡潔にして要を得たものであり、当時の状況をほぼ的確に記しているといえるでしょう。ただ1000尺もの涅槃像は知られていませんし、かなり誇張しているようですが、石窟の前に堆積している土砂の中に埋もれている可能性はあります。

東大仏は石窟群の東寄りに刻まれた大仏で、玄奘のいう100尺余りの釈迦立像にあたり、実際には高さ38メートルに及びます。バーミヤーンの断崖はもろい礫岩であるため、仏像全体にストゥッコ(粘土と漆喰)をかぶせて衣文などの細部を仕上げています。足元の粘土が剥落した部分にある無数の孔は、粘土と漆喰の付着をよくするために、縄などを巻いた木杭を差し込んでいたことを示しています。鍮石製すなわちブロンズであった

というのは明らかに玄奘の見誤りで、まだ彩色がよく残っていたのでそのように思ったのでしょう。両腕は肘で曲げて前に差し出し、右手は指を上にして掌を見せていたと思われる。これは施無畏印といい、信者の恐怖心を取り除くという印相(手のポーズ)です。左手は恐らく衣の端を握っていたのでしょう。この東大仏の衣文表現は、どちらかといえばガンダーラの衣文表現に類似しています。一方パイターヴァなどのカーピシー地方の作品は、左右相称で威厳に満ちた作品が多く、イランの影響やマトゥラーの影響が指摘されています。なおこの大仏は、2001年3月にタリバーンによって破壊されたということです。



写真14 東大仏遠景 6世紀頃 礫岩にストゥッコ 像高約38m

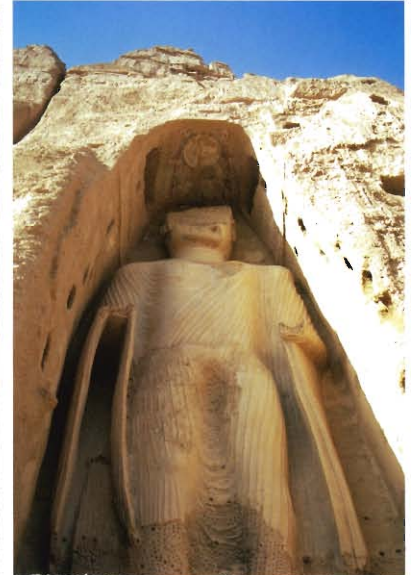


写真15 東大仏

写真16は巨大な仏立像を刻んだ龕の天井に描かれた壁画です。ラピスラズリによる青い背地に大きな白い円が浮かび上がり、それを背にして太陽神スーリヤが立っています。スーリヤは中央アジアの遊牧民の服装によく見られるコートをもとに、両肩にかけたマントが背後に翻えり、右手に槍をもち、左手を剣にそえています。上方に2体の風神が風をはら



写真16 太陽神スーリヤ 東大仏天井壁画 6-7世紀

んだ袋を手にして飛翔しています。画面下方には馬が4体描かれていた痕跡があり、スーリヤは4頭立ての馬車に乗っていたことがわかります。スーリヤの足元は大きく剥落していて、ここには御者が描かれていたに違いありません。その左右には、弓矢と盾をもち、背中に羽のある女神が認められます。色数は少なく、濃淡をつけずに同じ濃さに平板に

彩色しています。図像的には、古典ギリシアやインドの要素も認められますが、イランのそれがもっとも濃厚です。



写真 17 西大仏 6-7世紀 像高約 55m



写真 18 西大仏頭部

西大仏は石窟群の西端に位置するもう1体の大仏です。これを撮影したときにはインド考古局の調査隊が修復のために足場を組んでいる途中で、よく見ると働く人々が豆粒のように見え、いかに巨大な仏像かお判りいただけるでしょう。東の大仏と同様にお顔は唇の上までが垂直に切り取られていて、いつの頃かムスリム(イスラーム教徒)が削り取ったと一般的に考えられています。しかし単に偶像を破壊するのであれば、もっと乱暴に傷つけばよく、このようにきれいに削り取る必要はないでしょう。中国の磨崖仏にお顔を粘土で成型した例があるそうで、このバーミヤーンの東西の大仏も同様であったとする説もあります。唇や耳は大体の形を岩に刻んでおいて薄く粘土をかぶせて仕上げていますから、どうして同じ方法をとらなかったか疑問です。ところでこの像の左手から垂れる衣の部分は欠けていて、そこには点々と孔が掘られています。スライド14で説明したように、この孔に木材を差し込んで石の欠けた袖口の部分を粘土で補って作っていたことがわかります。もし唇から上が粘土を厚く盛って作っていたのであれば、垂直の壁面にも木材を差し込む孔があつてしかるべきでしょう。つまりムスリムが削り取ったという説も、粘土で作っていたという説も、疑問な点があり、未解決のまま本像も2001年3月に破壊されてしまいました。

両手のポーズは東の大仏と同じであったと思われませんが、肩幅が広く、腿も太く、均衡がとれてどっしりとした安定感があります。衣の襞もより流麗になっていて、表現技法の進展したことをうかがわせ、インドのグプタ時代のマトゥラー仏との関連性が認められます。629年に訪ねた玄奘が東大仏の近くの伽藍を先代の王が建てたと記していることから考えて、東大仏が6世紀末に、西大仏がやや遅れて制作されたと考えることができます。

西の大仏の龕は上方が三葉形に彫りくぼめられていて、この壁画は右肩の上の突出部に描かれています。いびつな円の中に3体の飛天を配し、花皿を捧げたり、散華したり、合掌したりしています。東の大仏の龕に描かれた壁画は濃淡のない平板な彩色でしたが、ここでは濃淡をつけて凹凸を表出しています(写真19)。



写真19 飛天 西大仏天井壁画 6-7世紀



写真20 供養菩薩 西大仏天井壁画 6-7世紀

西大仏の龕の天頂部と奥壁には、仏陀、菩薩、飛天や装飾文様が描かれていて、写真19の飛天とともにこれらはバーミヤーン壁画の中でももっとも洗練されています。剥落部分も少なくありませんし、砂ぼこりで表面が汚れていて彩色は当初の鮮やかさを失っていますが、伸びやかな描線や輪郭線に沿って陰影をほどこした立体表現に、画家の優れた力量をうかがうことができます(写真20)。

I洞では奥壁に刻まれていた本尊は古くに崩壊しましたが、龕の天頂部中央に一行に描かれた仏陀坐像の壁画は残っています。その壁画の1体で、冠をいただき、下縁をV字型に裁断した肩掛けを羽織っています。仏陀像は本来は衣をまとうのみでしたが、のちには菩薩のように装身具を着けた仏陀も出現しました。この壁画のように独特の肩掛けをつけた仏陀は、カシュミールからアフガニスタンにかけての地域で好んで制作されました。なお密教の大日如



来も装身具をつけていますが、その源流はこの「飾られた仏陀」ではなく、東インドで別個に成立したものです(写真21)。

写真22は写真21の仏陀坐像の列の両側の部分で、ヴェランダから上半身を現した天人が描かれています。冠のリボンや天衣をひるがえしながら太鼓などの楽器を演奏しています。



写真21 飾られた仏陀坐像 I洞天井壁画 写真22 ヴェランダの供養者 I洞壁画 7世紀
7世紀

H洞は東西の大仏のほぼ中間に位置し、龕の高さは約13メートルあります。粘土と漆喰で作られていた本尊は失われています。龕の天井には西大仏の龕(写真19)と同様に、散華する飛天が描かれています。しかしここでは2人1組で、一方の飛天が捧げる花皿に他方が手を伸ばしています。描線は西大仏壁画のそれと同様に流麗であり、表情も生彩に富んでいます。面貌は4分の3正面から描き、向こうの目尻が顔の輪郭線から飛び出ているのが注目されます(写真23)。



写真23 飛天 H洞壁画 7世紀

写真24はK洞の壁画で、右手を胸前に立てて、腹前に構えた左手に水瓶をもつことから、弥勒菩薩であることがわかります。豪華な装身具を克明に描写していますが、剥落と退色の激しいのが惜しまれます。



写真24 弥勒菩薩坐像
K洞壁画 7世紀

写真25はC洞のドーム天井に描かれた壁画で、光背を並べ、その間を装飾文様で埋めていて、彩色が鮮やかに

残っています。この光背の前に粘土製の仏陀像の彫刻を貼り付けていたに違いありません。



写真 25 C 洞壁画 7-8 世紀

1970 年代のバザールは人であふれ、チャイ・ハナ(茶店)は談笑する声で満ちていました。

写真 26 カーブル市内のチャイ・ハナの裏で玉ねぎをむく人



異文化交流は、世界中のあらゆる地域、あらゆる時代にごく一般的に見られることで、特別の現象ではありません。戦争もまた異文化交流の極端な一例であって、異文化交流が一部の支配者によって暴力的におこなわれることに問題があります。人類の歴史は、戦争が終わって平和な時代が訪れると、異なる文化の優れた点を取り入れて豊かな文化が築かれたことを教えています。アフガニスタンの地が一日も早く平和になることを願って私の話を閉じることにいたします。

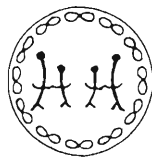
本稿は、国登録有形文化財畑田家住宅活用保存会主催の文化フォーラムでの講演「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代」(2002年11月17日)をまとめたものである。文中の写真を許可なしに複製することを禁じます。

発行 2003年11月1日

発行者 畑田耕一 (hatada@wombat.zaq.ne.jp)

発行所 畑田家住宅活用保存会

大阪府羽曳野市郡戸 1-1 (〒583-0874)



発行 2003年11月1日
発行者 畑田耕一 (hatada@wombat.zaq.ne.jp)
発行所 畑田家住宅活用保存会
大阪府羽曳野市郡戸1-1(〒583-0874)
TEL(FAX) 0729-55-4380